

上鍵山マンガン鉱山跡



掘削されたマンガンを仕分けるための作業場跡。付近には社宅跡も残されており、当時の賑わいを感じさせる

日吉地区上鍵山。かつてこの地域に人々の生活を支えた産業が存在していました。それが上鍵山マンガン鉱山です。

本格的な操業開始

明治の頃から地元の人の手による掘削が行われていたという本鉱山。昭和12年、城川町にある事業所とともに

に、一宝鉱山として本格操業に入りました。

当時、上鍵山事業所だけで従業員は50人にも上り、地域住民のほとんどが関係していたのではと言われるほど。また、井谷正吉氏の指導を受け、当時田舎では珍しかった労働組合を結成。この産業が、いかに大規模であったかを示しています。

生産量のピークは昭和26年頃。月量にして120トン、200トンを出し、質量とも関西一を誇っていた時期があったと言います。また、上鍵山事業所のマンガンは品質の良いものが多かったことから「関西一の名鉱山」と言われ、多くの鉱山関係者が視察に訪れていました。この大規模産業には憧れる人も多く、個人でマンガンを掘る人もいたと言います。

そして、閉山へ…

しかし、安価な輸入品の

増加など徐々に採算が合わなくなり、ついに昭和38年、本社の倒産により、操業が停止してしまいました。

当時を知る人が「これほどの産業は日吉にはない」と話すほど、何十億もの恩恵をもたらしたと推測されている上鍵山マンガン鉱山。作業場の跡地には、仕分け

時に落ちたであろうマンガンが今も至る所に見られ、当時の面影を残しています。まだ枯渇はしていないだろうと言われる本鉱山跡。今もなお、その鉱内には「関西一品質の良いマンガン」と謳われた鉱石が静かに眠っていることでしょう。

当時を知る人



兵頭 要さん(上段)
ひょうどう かなめ
= 上鍵山 =



兵頭 勲さん(下段)
ひょうどう いさお
= 城川町 =

兄の要さんは上鍵山マンガン鉱山の閉山まで、弟の勲さんは一宝鉱山の完全閉山まで働く。勲さんは現場監督として、要さんは労働組合長としても活躍。当時は山の神を祭る「山神祭(さんじんさい)」が年1回行われ、大勢の労働者たちで賑わっていたという。